平成 27 年度実践研究報告書

高知県立須崎工業高等学校　職名　教諭　　氏名　村田　絵吏

１　はじめに

平成 26 年度の実践研究では、ユニバーサルデザイン（以下、ＵＤ）にもとづいた授業実践を行った。構造化された授業内容や学習環境、視覚的な指示や教材・教具の示し方、多様な学習活動を取り入れた授業実践は、授業自体に緩急ができ、生徒が主体的に参加できる授業となった。その結果、定期考査の平均点、生徒・授業観察者・授業者を対象とした授業評価アンケート結果においても有意差がみられ、MIM(海津ら，2008)の 1st と 2nd ステージの生徒に焦点を当てた授業づくりは、高等学校の実態に沿っており、学習につまずきのある生徒だけでなく、理解の速い生徒や中間層の生徒にも有効であることが検証できた。

２　平成 27 年度の実践

今年度の実践は、高等学校の地理Ａ科目においてＵＤ化した授業実践により学力を定着させることを目的とした。

（１）対象教科・対象クラス

対象教科は地理Ａである。Ａ高校は、本年度より 1 年生の地理歴史科目が日本史Ａと地理Ａの選択必修科目となっており、1 クラスが 2 講座に分かれている。対象クラスは、1 年生Ｂクラスで地理選択者は 15 名である。例年、義務教育段階の基礎的な学力の定着にクラス内で差があることが多いが、対象クラスの生徒については、学力差はほとんど見られず、学習に著しくつまずきを見せる生徒はいない。しかし生徒の中には、ワークシート内の設問に自ら考え記述することやペア・グループ学習のような生徒同士が関わり合うことが苦手な生徒もいる。

（２）方法

授業実践については、4 月当初から高知県教育委員会が作成した『すべての子どもが「わかる」「できる」授業づくりガイドブック』[2] を参考とし、ＵＤ化した授業について検討し実践を行った。評価については、ＵＤに関する授業評価アンケートと学習内容に関する授業評価アンケートを 3 回実施（6 月 30 日、9 月 29 日、11 月 10 日）した。また、学力の定着については、1 学期及び 2 学期の定期考査平均点を平成 25 年度の地理受講者と比較した。

（３）授業の工夫

授業づくりにおける 5 つのＵＤポイントは、『環境の工夫』・『情報伝達の工夫』・『活動内容の工夫』・『教材教具の工夫』・『評価の工夫』である。5 つのＵＤポイントを達成させる手段として特に力を入れたのは、ＩＣＴの活用とペア・グループ学習である。

ア．ＩＣＴの活用

ＩＣＴの活用については、昨年度の研究の反省から学習の目標に応じて、ポイントを絞って活用した。使用頻度は、授業時間数の 8 割程度の頻度である。例えば、図 1 は生徒がつまずきやすい単元の 1 つでもある気候の単元で使用したスライドである。ケッペンの気候区分をもとに熱帯から寒帯までの生活と文化を学ぶ単元であるが、生徒にとってアルファベットで示される気候区分が整理されにくいため、苦手さを感じる単元でもある。そこで、気候に関する授業の導入時に、図 1 のスラ

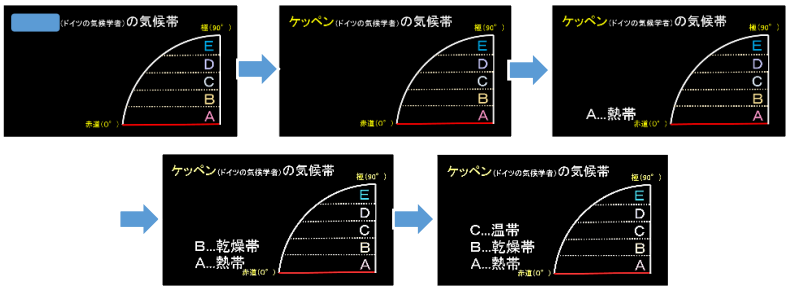

図１　前時の復習を目的としたフラッシュカード式のスライド

イドで反復学習をした。気候の単元で図１のようなスライドを毎時間、授業の導入時に活用したことで、ケッペンの気候区分であるアルファベットの組み合わせが整理され、知識として定着した生徒が増えた。

イ．個別学習→ペア・グループ学習

ペア・グループ学習では、生徒同士の学び合いの学習場面から地理的な見方や考え方を身に付けさせることを目的とした。最初に個別で考える時間を設定し、その後ペア・グループ学習で共有した。活動のルールを決め、グループ内の役割を輪番制とした。また、ペア・グループ学習が苦手な生徒に対しては、教員が橋渡し役となれるよう支援した。使用するワークシートは、生徒がスムーズに活動できるように、１問目に主観で答えることができる設問項目を設定した。

（４）結果

ア．定期考査

平成 25 年度と平成 27 年度の１学期及び２学期の定期考査平均点の相関を示したものが図 2 である。学習内容や定期考査の難易度はほぼ変わらないが、平成 25 年度は地理Ａが選択教科ではないため、平成 27 年度より絶対数が多い。平成 25 年度の１学期定期考査平均点は 64.5 点、2 学期定期考査平均点は 50.9 点で平均点は 13.6 点下がった。平成 27 年度の１学期定期考査平均点は 78.1 点、2 学期定期考査平均点は 73.8 点で、平均点は 4.3 点下がった。

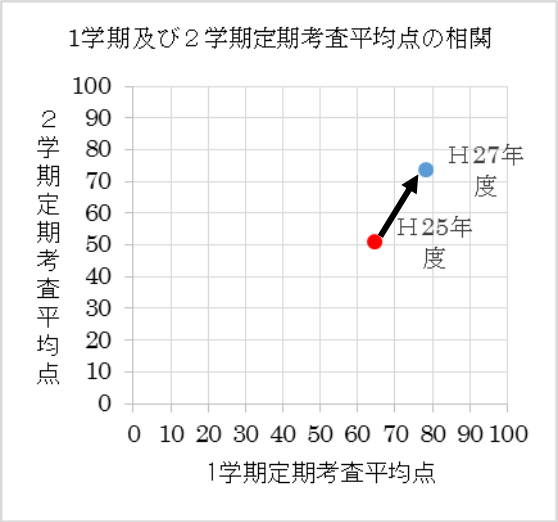

図２　平成 25，27 年度の１学期及び２学期定期考査平均点の相関

イ．アンケート

3 回実施した授業評価アンケートについて、ＵＤあるいは学習内容に関するアンケートはともに肯定的評価が多く、有意差は見られなかった。

（５）考察

ア．定期考査

地理Ａ科目が平成 25、27 年度で必修科目と選択必修科目の違いがあること、生徒の絶対数の違いがあることを考慮すると信頼性が高いデータと言い難い点がある。しかしながら、例年 10 点程度下がる２学期定期考査平均点が、本年度についてはその差が 4.3 点であり、差は小さくなった。これは、ＩＣＴを積極的に活用したため授業内容が生徒にとって視覚的にイメージしやすかったこと、前時に使用したスライドを本時の導入時に復習するツールとして活用したこと、生徒同士が学び合う活動を取り入れたことなどの影響と推察できる。

イ．アンケート

アンケート項目は、ＵＤに基づいた授業について教員の評価を問う項目と学習内容や生徒自身の理解度を問う項目を中心に 20 程度の質問項目がある。アンケート結果に有意差が見られなかったのは、4 月当初からＵＤを取り入れた授業に努めていたことや生徒の絶対数の不足が考えられる。

ウ．生徒の変容

生徒同士が関わり合い、学び合うペア・グループ学習を授業に取り入れることで、生徒に良い変化が見られた。1 学期には、自己の回答を白紙で提出するなど消極的な姿勢を示していた生徒が、2 学期には自己の考えを表現しグループ内で発表できるようになった。これは、生徒一人ひとりの考えが尊重されるようルールを設定し生徒が安心して授業に参加できるようになったこと、また、資料の見方を示したり、思考をスモールステップ化した継続的な支援が有効だったと考えられる。

３　おわりに

本年度の授業実践について、ＵＤに基づく授業づくりが学習につまずきのある生徒だけでなく、全ての生徒の学び方の違いを保障する面でも有効であることを改めて体感できた。生徒一人ひとりが尊重され、生徒同士が関わり合い学び合うことができ、多様な学習方法で生徒の知的好奇心をくすぐることができる学習環境は、生徒の学習意欲を維持・向上させ、「できる」「分かる」ことで自己肯定感が高まり、学校生活における学校適応感にもつながるのではないかと感じた。

学校現場の教職員は、日々生徒にとって分かりやすい授業の実践に努めているが、ＩＣＴの機器設備をはじめとするハード面が十分とは言えない現状もある。また、一斉授業が一般的である高等学校において、研修等で教職員がスキルアップできる機会を確保することもより一層重要であると言える。

[引用文献]

１）海津亜希子・田沼実畝・平木こゆみ・伊藤由美・Sharaon　Vaughn. (2008). 通常学級における多層指導モデル（MIM）の効果－小学１年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて－. 教育心理学研究、2008,56、534-547.

２）高知県教育委員会(2013)　すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック-ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援-